

IAUD Newsletter vol.5 第14号 (2012年12月号) 目次

1. IAUD アワード 2012 受賞紹介①特別賞・寛仁親王賞受賞・・・1
2. 国際会議を終えて 小島実行委員長のコメント・・・7
3. 標準化研究 WG「震災グッズの使い易さワークショップ」開催報告・・・10
4. IAUD 定例セミナー開催のお知らせ・・・11



地域の活性化と住民の活動意欲向上を目指して ～特集：IAUD アワード 2012 受賞紹介①

特別賞・寛仁親王賞受賞：

リコーグループにおける東日本大震災被災地復興支援活動

「IAUD アワード 2012」は 34 件のエントリーの中から、IAUD アワード 2012 審査委員会による審査の結果、「特別賞」、「大賞」、各部門の「金賞」「銀賞」の 11 点が選定されました。審査結果および講評は「第 4 回国際 UD 会議 2012 in 福岡」でも発表され、金賞以上の受賞者にはプレゼンテーションを行なっていただきました。

Newsletter では、「IAUD アワード 2012」金賞以上を受賞した 7 点の取り組みを、会議に参加されなかった皆さまにも改めてご紹介していきます。

今号は、「特別賞・寛仁親王賞」を受賞した「リコーグループにおける東日本大震災被災地復興支援活動」です。審査委員長のロジャー・コールマン英国王立芸術大学院名誉教授は、「有事の際の人々の身体的、精神的ニーズにしっかりと照準をあわせ、また社員の社会貢献への志を支援しているこの応募作品は、CSR 分野で画期的である」と高く評価しました。この取り組みの詳細を、(株)リコーCSR室の阿部裕行様にご紹介いただきます。

被災地復興支援活動の理念



↑コミュニティ巡回型情報プリントサービスの様子

リコーグループは、持続可能な社会形成を目指し、事業活動の基礎となる理念・価値観（三愛精神・経営理念）に基づき、UDの基本的考えである「一人でも多くの方に「安全」と「安心」「心地よさ」「使い易さ」を提供すること」を念頭におき、被災地復興支援活動を展開しています。本活動は、被災した方々が元気になり、従来の生活環境に戻るだけでなく、この活動を通して、震災以前よりも地域が活性化し住民の活動意欲が高まることを狙って支援を継続しています。

リコーグループの創業の精神と経営理念

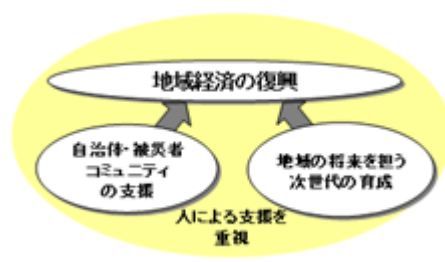
<三愛精神> 人を愛し 国を愛し 勤めを愛す

<経営理念>

- ・顧客に対する使命：人と情報のかかわりの中で、世の中の役に立つ新しい価値を生み出し、提供しつづける
- ・社会に対する使命：かけがえのない地球を守るとともに、持続可能な社会づくりに責任を果す。

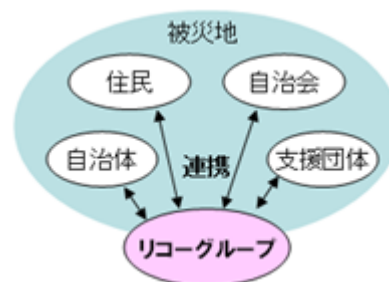
支援の考え方

東日本大震災における支援活動を、特に「自治体・被災者及びそれらで形成されるコミュニティの支援」と「その地域の将来を担う次世代の育成」に重点をおき、人による支援を重視し、継続的な支援が可能な仕組みをつくり、活動を行っています。



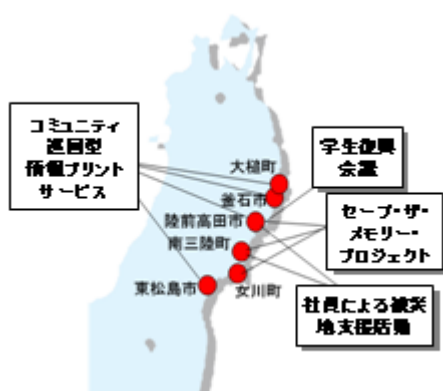
被災地に密着した支援

被災地では、自治体、自治会、住民、およびその他の被災地支援団体とともに、グループ各社の事業の特性を活かして連携し、被災地の状況をよく把握した上で、最適な支援を提案実施しています。



支援活動 3つのステップ

リコーグループでは、東日本大震災における支援活動を、3つのステップ（Step1：緊急支援 → Step2：復旧支援 → Step3：復興支援）に分けて実施していますが、今回は Step3 に位置づけられた被災地の「復興支援」に関わる代表的な以下の4つの活動をご紹介します。



Step3：復興支援：

- Action1. コミュニティ巡回型情報プリントサービス
～一人ひとりに届くサービスを心がけて～
- Action2. セーブ・ザ・メモリープロジェクト
～失われた写真をお届けする
心の震災復興支援事業～
- Action3. 社員による被災地支援活動
～支援、学び、そして自主的な活動へ～
- Action4. 学生復興会議を開催
～高校生の発想を復興の力に～

Action1. コミュニティ巡回型情報プリントサービス ～一人ひとりに届くサービスを心掛けて～

<活動概要> (活動地域：大槌町、釜石市、陸前高田市、東松島市)

“行政からの情報が十分に届かない”、“各種申請に必要な罹災証明書等をコピーする手段が無い”などの困りごとに対して、トラックにリコーの複合機を搭載し、避難所や仮設住宅を巡回し、市役所からのお知らせ情報の配信や各種証明書等のコピーニーズに応えるサービスを9ヶ月間にわたり展開しました。

■被災者に寄り添いご要望をかなえる

お年寄りや身体の不自由な方も多い中、被災された方々とのコミュニケーションを図りながら、一人ひとりに届くサービスを心がけて活動してきました。被災者証明、罹災証明、保険証、免許証、相続関連書類、瓦礫撤去願い、異動届、学校の連絡表など様々なコピーの依頼に対応いたしました。が、「水田作付け可能範囲」の地図や、震災前／震災後を撮影した航空写真などの意外なコピーの希望もありました。



仮設住宅で住民の方々のご要望を聞きながらサービスを実施

■新しいコミュニティづくりを支援する

単にコピーするだけでなく、住民が避難所から仮設住宅への移転、仮設住宅での自治会の発足にあたり文書作成などに関わり、新しい街づくりの一助となってきました。身体の不自由な方やお年寄りが多い被災地の中で、そこで暮らす方々に寄り添ったサービスとして、被災者の方々に喜んで頂きました。



仮設住宅自治会への支援活動

現在は、コピー機などの普及がすすみ、コミュニティ巡回型情報プリントサービスの役割は自治体の自主運営に移行しています。また、コミュニティでは自治会を支援する支援員が配置され、私たちが進めてきた役割が移行しつつあり、現在は支援員の教育などのサポートに注力しているところです。

Action2. セーブ・ザ・メモリープロジェクト ～失われた写真をお届けする心の震災復興支援事業～

<活動概要> (活動地域：陸前高田市、南三陸町、女川町)

津波に流された持ち主がわからない写真を持ち主にお返しする心の震災復興支援事業。写真をデジタル化してリコーが提供するオンラインストレージサービスの「quanp」に保管し、各自治体の写真センターで公開。住民の方が検索し、持ち主がわかったものから写真の原本とそのデータをお渡ししてきました。

■思い出を再現してあげたい (洗浄工程)

津波に流された写真やアルバムは、泥に汚れたり、異物がこびりついています。そんな写真を丁寧に一枚ずつはけやウエスでふき取りながら再生してきました。



津波で汚れた写真・アルバム

一枚ずつ丁寧に洗浄

乾燥

■思い出をはやく返してあげたい (デジタル化)

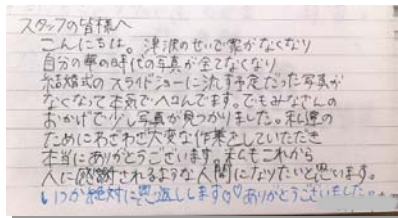
住民の皆さんが、はやく写真を見つけられるように、再生した写真を、クラウド上のデジタルデータとしていきます。2012年3月までに、30万枚の写真データを永久的に保存できました。



写真を一枚ずつスキャンしてデジタル化

専用の写真検索サイトに掲載

住民が写真センターで検索



作業の励ましとなった住民からいただいたお手紙



従来の写真展示場で自分の写真を探すのには時間がかかった。

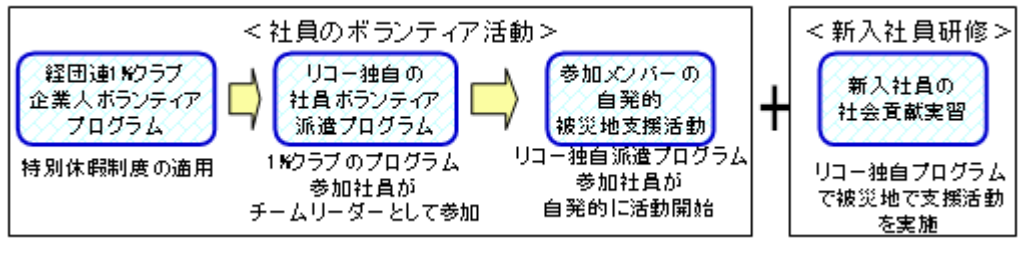
現在は、本サービスをセーブ・ザ・メモリー サービスパッケージとして沿岸部自治体に提供開始し、自治体が主体となった活動に移行しています。

Action3. 社員による被災地支援活動

～貢献、学び、そして自主的な活動へ～

<活動概要> (活動地域：陸前高田市、南三陸町)

リコーグループでは、社員が被災地支援活動を通して、継続的なボランティア活動に取り組むきっかけづくりを支援しています。また、新入社員を対象に、被災地において社会貢献実習を実施し、気づきや学びの場づくりを積極的に行っています。



■社員のボランティア活動

各事業所から5クール約100名の社員ボランティアが岩手県陸前高田市に赴き、道路等の瓦礫の片付け、個人宅の片付けを支援してきました。多くの社員に活動に関心をもってほしいとの考えから、社内イントラネットで、被災地の情報やボランティア情報にいつでも社員がアクセスできるデータベースをつくり、参加しやすい環境をつくっています。また、アンケートより参加した社員の半数以上の社員が、自ら支援活動を行うきっかけづくりができたと回答しており、育成成果につながることもわかりました。会社が社員の背中を少しだけ押すことで、被災地支援の大きな輪が広がってきました。



瓦礫の撤去



泥の撤去



見つかった物品の仕分け



被災した住宅の清掃

■2012年度新入社員（リコー）の社会貢献実習

新入社員約200名が、宮城県南三陸町で漁業への支援活動を行いました。この実習のねらいは、リコーの継続的な被災地復興支援活動の一つとして実習を通して被災地のコミュニティ再建に貢献すること、そして被災地の方々にお役立ちする行動の実践を通して様々な気づき・学びを得ることです。主な活動は、ワカメや牡蠣の養殖いかだのおもり作り。NPO法人JENとのパートナーシップにより2班に分かれて活動しました。



南三陸の漁師さん
とともに



養殖用いかだの
おもりづくり



昆布の選別作業



協業したNPO団体
とともに

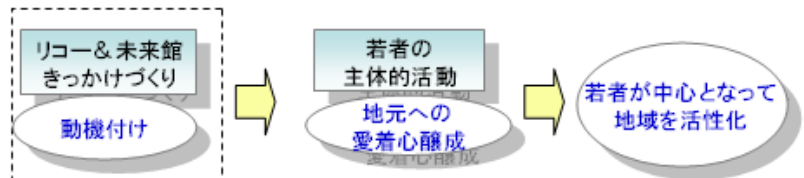
新入社員は実際に現地を見て被災者と直接ふれあうことで、たくさんの気づき・学びを得ています。

Action4. 学生復興会議を開催～高校生の発想を復興の力に～

<活動概要> (活動地域：陸前高田市)

高校生の声をまちづくりに活かすことで、地域の活性化を図ると同時に、将来を担う若者自身の主体性や向上心を育むことをねらいとして、科学コミュニケーションの専門性をもつ日本科学未来館とリコーが協働し、被災地の高校生が自分たちの「まち」に息吹を与え交流の中心となる“まちのシンボル(施設)”をテーマに、アイデア出しを行うプログラム（ワークショップ）を実施しました。

- 開催日：2011年8月6日(土)
- 場所：岩手県陸前高田市 第三仮庁舎
- 対象：岩手県立高田高等学校の生徒 39名
- 連携パートナー：日本科学未来館
(館長 毛利衛氏)



■自分たちの想いを言葉に、かたちに

学生復興会議に参加した高校生は、グループ討議や建築家とのディスカッションを通して、自分たちの思いを言葉やかたちにしていきました。



■シンボル施設のアイデアを戸羽太 陸前高田市長に提案

陸前高田の海や森から採れる特産品を味わえる「物産館」、津波の被害を多くの人に伝えるための「伝承館」や「復興の様子が眺められる施設」など、生まれ育ったまちの復興を願う学生たちの思いが伝わるアイデア等が、寸劇仕立ての楽しい演出で提案されました。



発表の準備



活動にコメントする戸羽市長、毛利氏

■戸羽市長コメント：
参加した高校生が、陸前高田が大好きで、シンボル施設について良いアイデアを持っていることがわかった。陸前高田市の復興において、高校生に主体的に参画してもらう価値と可能性を感じる事ができた。

■生徒の感想：

復興は誰かが考え、やってくれるものだと思っていたが、みんなで考えを出し合う中で自分も何かできたらと考えられるようになった。

■先生の感想：

生徒の潜在能力にあらためて気づくことができた。学校だけ、市だけではできない企画だった。

集まった高校生の思いとアイデアは、セーブ・ザ・チルドレン (NGO) が主催する「子どもまちづくりクラブ」の活動へと受け継がれています。リコーはこの活動を継続的に支援していきます。

※「IAUD アワード 2012」審査結果及び受賞理由は以下のサイトをご覧ください↓
<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1211/22-204500.php>

安全・安心の備えを理解する一助に

「第4回国際UD会議 2012 in 福岡」開催報告第4弾： 国際会議を終えて 小島実行委員長からのコメント



10月12日（金）から14日（日）まで、福岡国際会議場などで開催された「第4回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2012 in 福岡」は、世界22カ国・地域から約11,400名のご参加をいただき、盛況のうちに終了いたしました。

今号のNewsletterでは開催報告第4弾として、小島文代実行委員長／IAUD理事長より頂戴した会議を終えてのコメントを掲載いたします。

←閉会式で大会宣言を読み上げる小島実行委員長

グローバル化を実感

「第4回国際UD会議2012 in 福岡」は関係各位のご尽力により、おかげさまで無事に終了することができました。実行委員長として、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

福岡市からの熱心な誘致もあり九州での会議開催に至りましたが、開催前には企業や参加メンバーの準備と移動の負担が大きいと予想され、動員数の確保について懸念もございました。

しかしながら、総裁・故寛仁親王殿下のご次女である瑠子女王殿下には開会式にご臨席いただき、また展示会も熱心にご観覧いただいたことは、関係者にとって誠に大きな励みとなりました。

さらに、九州の自治体の方々の強いご支援及び前向きなご活動にも後押しされ、全体としては成功裏に終えることができたと思います。

来場者については、円高とアジア情勢の影響により、海外からの参加者がやや減少しましたが、アジア・アフリカなど参加者の地域の広がりや質の観点から見ますと、グローバル化が確実に進んでいると感じました。



瑠子女王殿下にご臨席いただいた開会式



特に、最終日には海外の4団体とIAUD間で「グローバルコミットメント」が調印され、今後は“協力して活動する意思”を確認できました。

さらに、アジアからの参加者より“自国でUD活動を広げるための具体的なアドバイス”の依頼や発言もあり、活動の広がりを実感できました。

←グローバルコミットメント調印式

教育現場とUDの連携必要

併設の展示会については、前回の浜松では小学生の見学者数が多くございましたが、今回は開催日が金・土・日であったため、学校からの団体見学が少なく感じられました。今後は、先生方が引率可能な平日での開催や、生徒を対象としたイベント等の検討など、教育現場とUDの連携に配慮した仕掛けが必要でしょう。

一方、今回は造幣局や印刷局からご出展いただきました。生活全般で使用する紙幣やコインへのユニバーサル配慮などの説明も含め、IAUDとしてUDの観点での要望を直接、お伝えする場を提供できました。

さらに、屋外展示での特別企画展「命を救うデザイン」においては、小さいお子さまを含む家族連れを中心に、予想を上回る人数のご参加をいただきました。通常は見学の機会が少ない護衛艦や消防車両等を近くで見学でき、関係者様から説明も頂けた点については、広く一般の方々にも安全・安心の備えを理解する一助になりました。

→家族連れで賑わった屋外展示



今回の新たな試み

会議最終日には、UDの更なる普及と実現をめざす活動の一環として、初めて「UD検定」を実施しました。和気藹々とした勉強の場と真剣なテストの場を提供でき、今後につながる新たな事業として期待されます。

また、「IAUDアワード2012」では「特別賞」として「寛仁親王賞」、また大賞には「経済産業大臣賞」も併せて表彰しました。UDの顕著な活動を讃えるこの事業は、これからのUDの質の向上と活性化に役立つことでしょう。



さらに、毎回感じることでありますが、「特別ワークショップ 48時間デザインマラソン」の“熱い盛り上がり”と“貴重な体験”については、会議初日に開催されたプレゼンテーション／表彰式を通して改めて感動しました。参加の皆様に感謝いたします。

←48時間デザインマラソン 表彰式

また、IAUD研究部会について、これまでは会議室で行っていたプレゼンテーションを、今回は新たな試みとして展示会場に変えて実施しました。気軽に立ち寄れる良さが活かされていた様で、参加してくださる方も多く、ディスカッションの場としての可能性を感じました。

次世代への継承を意識した新しい企画を

会議初日は非常に活気にあふれており、展示会場にも多くの参加者を見かけましたが、2日目と3日目のセッションや論文発表の場への来場者は少なく、残念でございました。専門性や知識を磨く場は少人数でも有意義ですので、今後もぜひ続けたいのですが、これからは現実を見据えて、会場規模の見直しなどを進める必要があると考えております。また、国際会議の隔年開催を進めると仮定した場合、準備期間が短く、出展者や実行委員会共に多くの負荷がかかります。これからは、移動の少ない場所での開催を選定するなど、効率的な運営にも配慮する必要があるでしょう。

さらに、多くの方が気軽に参加できる場として成り立つためには、国際会議を地域の活性化やグローバル化だけでなく、UDのノウハウを持ったIAUDを立ち上げた方々の活動の場としても位置づけ、若い世代との交流や経験知の伝承など、次世代への継承を意識した新しい企画を生み出す必要があるでしょう。

IAUDとして、今回の会議で得たものや今後の課題などについて総括をしっかりと行い、次に繋げたいと考えています。

これからもIAUDの活動に対し、皆様の更なるご支援・ご協力を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。（了）

UD マトリックス普及に向けた活動

標準化研究 WG「震災グッズの使い易さワークショップ」開催報告



多様なユーザーに対応した活動への更なるスパイラルアップと、震災後に求められる UD 標準化の対応強化の活動に取り組んでいる標準化研究 WG は、「第 4 回国際 UD 会議 2012in 福岡」開催中の 10 月 13 日（土）と 14 日（日）の 2 日間、福岡国際センターで行われた展示会において、「震災グッズの使い易さワークショップ」を開催しました。その様子を、同 WG の瓦田充生氏に報告していただきます。

非常時における不便さを啓発

同 WG は、多様なユーザーに対応するため、「IAUD・UD マトリックス」の織込み内容及び表現を精査する取り組みを行なっています。また、同時に東日本大震災後に求められる UD の標準化に向けた検討も始めています。

これらの取り組みと UD マトリックスの普及、また非常時における多様なユーザーの立場や不便さを啓発することを目的として、今回の会議テーマである『安全・安心』に対応した「震災グッズの使い易さワークショップ」を、「第 4 回国際 UD 会議 2012in 福岡」の展示会場で実施しました。

擬似体験用具を装着して震災グッズ使用

ワークショップ参加者には、高齢者や障がい者の身になって体感していただくため、擬似体験用具を身に付けた状態で、震災グッズを非常時に使うことを想定して実際に使用してもらい、アンケートによる使い易さの評価を行っていただきました。

また、同 WG メンバーは参加者の行動を観察シートに記録しました。

使用した震災グッズ 5 点

- ・非常食（アルファ米 5 種類）
- ・手動充電式ラジオ
- ・組立式簡易トイレ
- ・レインコート上下（一般的に使用されているもの）
- ・絆創膏（一般的に使用されているもの）

体験用具

- ・高齢者・障がい者擬似体験用具“うらしま太郎”他
- ・色弱模擬フィルタ“バリエントール”

評価用紙、帳票

- ・アンケート用紙
- ・行動観察シート



デザインの重要性を再認識

ワークショップには、予想を上回る 35 名の方に参加していただきました。

アンケートでは、非常食に関して「封が開けづらい」「スプーンが小さく持ちづらい」、手動式充電ラジオは「スイッチが小さく回しづらい」「スイッチの表示が小さく見づらい」、また簡易トイレは「便座の高さが低い」など、多くの評価が得られました。今回の体験を通じて、参加者には高齢者や障がい者など多様なユーザーに対し、分かり易く使い易いデザインをする必要性を、身をもって理解していただきました。

また、同 WG メンバーも震災グッズを用いた体験会を実施したことで、さまざまな状況を考慮したデザインの重要性について、再認識することができました。



多様性を考慮した UD マトリックスに向けて

今回は、アジアをはじめ海外からの参加者も多く、海外では震災グッズそのものが普及していないこともあり、参加者の興味関心が深かったように見受けられました。

今回の結果も踏まえ、更にユーザーや使用環境の各多様性を考慮した UD マトリックスに向けて、改良して行きます。(了)

IAUD 定例セミナー開催のお知らせ

IAUD は 2013 年 1 月より、各省庁や自治体関係者を講師に、UD に関する政策や課題などについてお話いただくセミナーを、会員の皆様を対象に定期的に開催します。



第 1 回目を 2013 年 1 月 9 日 (水) 午後 2 時より、(株)リコー大森事業所本館ホール (東京都大田区) で開催します。

今回は、内閣府大臣官房審議官 渋谷和久氏 (写真左)、経済産業省商務情報政策局クリエイティブ産業課長 岸本道弘氏を講師にお迎えし、それぞれ「人にやさしいまちづくり」「クール・ジャパン産業を海外へ」をテーマにお話ししていただきます。

開催の詳細及び参加ご希望の方は下記のページをご覧ください↓

<http://www.iaud.net/event/archives/1211/29-141609.php>

次号は 12 月下旬発行予定

特集：IAUD アワード 2012 受賞紹介②事業戦略部門金賞受賞 (予定)

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター (IAUD サロン) :
〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話 : 03-5541-5846 FAX : 03-5541-5847 e-mail : salon@iaud.net